東アフリカの遺跡と陶磁器（II）
－2019年の調査から－

長崎大学多文化社会学部　野上　建紀

Archaeological sites and Ceramics in the East Africa (II)

Takenori Nogami (Nagasaki University)

In 2019, the author surveyed the archaeological ruins in Tanzania and Kenya to research on ceramic trade between East Africa and Asia. In 9-10th centuries Chinese ceramics were imported to East Africa by the Indian Ocean trade. And with the development of the Swahili cities, the ceramic trade flourished. A lot of Chinese porcelain such as celadon, white porcelain, blue and white were imported. The ceramic trade had continued under control of Portugal and Oman in 16-19th centuries, too. The author discusses on three themes showing ceramics found in archaeological ruins in East Africa. The first theme is on the origin of the pillar tombs and the second is on trade of Hizen porcelain in East Africa. And the third theme is on the spreading of Chinese porcelains under control of Oman in 18-19th centuries.

The Key Words: East Africa, Swahili culture, ceramic trade, ceramic road, porcelain

１．はじめに

まず東アフリカの遺跡と陶磁器の調査を始めた経緯を簡単に述べよう。筆者は2004年にマニラで初めて肥前磁器の出土を確認して以来、マニラとアカプルコを結んだマニラ・ガレオン貿易によって運ばれた肥前磁器に関する調査研究を行ってきた。すなわち、メキシコシティを皮切りにメキシコ各地の都市、グアテマラ、パナマなどの中米の国々、カリブ海のキューバ、そして、南米のペルー、コロンビア、アルゼンチン、チリなどの遺跡から出土した陶磁器の調査を行ってきた。当時、いわゆる「鎖国」と呼ばれる江戸幕府の一種の海禁政策によって、日本の海外との窓口が「四つの口」に絞られ、来航する船の船籍も制限される中、日本に来航することのなかったスペイン船が肥前磁器を運んだ事実と実態

を明らかにすることが目的であった。東アフリカの調査もまたその延長である。17世紀から18世紀にかけての東アフリカの海岸部はポルトガルやオマーンの支配下であった。ポルトガル船やインド洋海域で交易活動を行っていたイスラームの商船などは日本に来航することはなかったが、東アフリカでも肥前磁器が数点確認されている。キルワ・キシワニでは「スルタンの墓」に17世紀後半の有田の染付芙蓉手皿が嵌め込まれ、モンバサのフォート・ジーザスでも17世紀後半の有田の染付芙蓉手皿が出土している。考古資料ではないが、モンバサに伝世していた17世紀末～ 18世紀前半の有田の色絵大壺がフォート・ジーザスに所蔵されている。そのため、ポルトガル船やイスラーム商人の船もまた肥前磁器を運んでいたのではないかと考え、その仮説を検証する調査を計画した。

まず2018年の５月にザンジバル、８月にタンガニーカ（ダルエスサラーム、バガモヨ、キルワ・キシワニ、キルワ・キヴィンジ）の調査を行い、そして、３度目のアフリカ行きとなる今回、2019年４月～５月にかけて、タンザニアとケニアの遺跡とその出土陶磁器等の調査を行った（図１）。2018年の２回の調査についてはすでに報告を行っており（野上2019）、本研究ノートは2019年の調査成果の報告といくつかのテーマの検討を行うものである。

２．東アフリカと「陶磁の道」

2-1　東アフリカとインド洋交易

インド洋を舞台にした海上交易の歴史は古い。インド洋西部海域に吹く季節風「ヒッパロスの風」を利用して、アラビアとインドの間、東アフリカとアラビアの間の交易活動が紀元前から行われてきた。この「ヒッパロスの風」のことを記した紀元１～２世紀頃の『エリュトゥラー海案内記』にも、アラビアのモカの港から毎年多数の船が東アフリカへ行き交易を行っていたことが記されている（福田2018：235）。それには、アザニアーと呼ばれていた東アフリカ沿岸にはラプタという港町があり、アラビア半島のムーザという町の商人との間で交易が行われていたことが記されている。ラプタについては諸説あるが、ムーザというのはモカのこととされている。取引されていた商品は、アフリカの象牙と亀甲、犀角などであった。

８世紀半ばにバグダードを首都としてアッバース朝が成立すると、バクダードにつながるペルシア湾経由のルートが中心となり、ペルシア湾岸地域やオマーンからやって来たア

ラブ系やペルシア系の商人が、東アフリカの港町に数多くみられるようになった（福田2018：240）。やがて８～10世紀頃までにイスラームが島嶼部で受け入れられ始め、交易もほぼ定期的に行われるようになり、「スワヒリ文化の夜明け」を迎える。10世紀頃には、各地の手工業製品を輸入する一方で、東アフリカからは金、龍涎香、象牙、材木、スパイス、そして、奴隷が輸出されている（福田2018：239）。続く10～13世紀にはイスラームが広く普及するとともにキルワ、マンダ、モガディシオなどの港湾都市が形成されていき、スワヒリ文化の展開期に至る（富永2009:116）。キルワは12世紀後半頃には金の交易などによって繁栄するようになり、13世紀には金、象牙、奴隷の交易など、周辺地域の交易を支配し、その繁栄を続け中心的な海港都市としてその重要性を強めたという（福田2018：242）。そして、15世紀末にかけて、キルワの他にもモガディシオ、パテ、ラム、マリンディ、モンバサなどの海港都市が成長し、それぞれ交易活動で栄えるようになった（福田2018：242）。

このスワヒリ都市の世界を変えたのは、ポルトガルの来航である。ヴァスコ・ダ・ガマ率いるポルトガル艦隊が喜望峰を回り、モザンビークを経てキルワを通過し、モンバサを経た後、1498年４月13日にマリンディに到達した。1509年にはインドのディウの沖合でエジプトなどイスラーム側の連合艦隊を破り、以後、インド洋交易の支配権はポルトガルの手に移った（福田2019：246）。ポルトガルに協力的であったマリンディと異なり、モンバサは執拗に抵抗を続けたが、ポルトガルはモンバサ - オスマン軍を打破すると、東アフリカ沿岸部一帯での支配を確立した。モンバサには堅牢な要塞を築き、1593年に完成させた。今に残るフォート・ジーザスである。しかし、インド洋の通商はポルトガルの支配を受けるようになったとはいえ、許可証をもらい、関税を支払えば、制約付きで通商活動を行うことが許されたし、インド洋と紅海の間では密輸船が横行していたため、以前ほど自由ではないものの、従来の交易も途切れることなく続いていた（福田2018：348）。そのため、パテのように統制の網の目をかいくぐって交易が発展した都市もあれば、キルワ・キシワニやマリンディのように外部の世界からの隔絶を経験した都市もあった（富永2009：132）。

その東アフリカでのポルトガル支配も17世紀末には終わることとなる。1698年に、オマーン軍によって包囲されたフォート・ジーザスが陥落し、東アフリカからポルトガル勢力が駆逐され、オマーン支配の時代を迎えたのである。オマーン支配下のスワヒリ沿岸部では、サイード王とその後継者が力を注いだ経済活動の展開に伴い大きく変化した。例えば、ザンジバルは内陸の奴隷や象牙の中継貿易とクローブ生産、マリンディやモンバサはザンジバル島やアラビア半島向けの穀物生産を盛んに行い、キルワ・キヴィンジェは内陸からの

奴隷の積み出し港として発展を遂げた。バガモヨは象牙の積み出し港として栄え、ラムはアラビア半島に輸出される奴隷貿易の中継地やインド向けの象牙や皮革の集積地として繁栄した。オマーン支配がもたらした経済効果によって、多くの富が集積されたが（富永2009：141）、19世紀末には西欧列強の支配が強まり、東アフリカは植民地時代に入り、以後、イタリア、イギリス、ドイツ、フランスの支配下に置かれ、分割されながら、それぞれの歴史を重ねることとなる。

2-2 東アフリカと「陶磁の道」

インド洋交易の中に東アジアの陶磁器が商品として登場し始めるのは、9～10世紀のことである。そして、「スワヒリの夜明け」とともに東アジアの陶磁器が東アフリカにもたらされた。エジプトのフスタート遺跡や西アジアの遺跡でみられる9～10世紀の越州窯の青磁などが東アフリカにも運ばれ、「陶磁の道」が東アジアから東アフリカまでつながったのである。その後、スワヒリ都市の形成と発展に伴い、東アフリカにもたらされる陶磁器も増大していった。すなわち、11世紀から15、16世紀に及ぶ浙江の竜泉窯青磁やその他福建・広東方面の青磁、12～15、16世紀にわたる江西の景徳鎮の青白磁や、福建の徳化窯をはじめとする福建・広東地方窯の白磁、14～15世紀の釉裏紅や、14世紀から16、17世紀まで続く景徳鎮や華南諸窯の染付（青花）や五彩などが東アフリカの中世の町で見られる（三上1969：57）。東アフリカのスワヒリ都市が海港都市として発展した10世紀から15世紀末にかけての時期はもちろん、15世紀末にポルトガルが来航した後、さらにポルトガルによる支配が確立してからも中国の陶磁器が中世の東西世界に渡された「陶磁の道」をとおして東アフリカに運ばれ続けた（三上1969:50）。もちろん、ポルトガル勢力が駆逐され、オマーン支配になってからも陶磁器の輸入は続いた。

以上が東アフリカに渡った東アジアの陶磁器の概要であるが、これまで「陶磁の道」に関する研究は中世以前が主体であり、それ以降の新しい時代の「陶磁の道」の研究はあまりない。清朝以降の陶磁器についてはあまり関心が持たれることが少なく、その結果、オマーン支配下に流通した陶磁器の研究が乏しいものとなっている。それは史料が豊富な時代となり、歴史を叙述するための考古資料の役割が相対的に小さくなっていることも理由の一つであるし、陶磁器の特産品としての付加価値が失われ、生活用品として世界に普及したことで、東アフリカの地域を特色づける資料として扱いづらくなったことも理由の一つであるかもしれない。

しかしながら、そうした時代であっても東アフリカの人々の生活、特に食生活を知る上で受容した陶磁器を研究することは重要であると考える。奴隷貿易で栄えたザンジバルの海岸では数多くの清朝磁器が海岸で採集されているし（野上2019）、タンザニア各地で出土し、伝世もしている（野上他2019）。今回の調査でも数多く発見することができた。近世以降の資料はむしろ中世までの資料よりも多く、その中に潜在する情報は当時の生活の復元に寄与するであろうし、中世以前の陶磁器貿易を相対化するためにも必要な研究と考える。

また、東アフリカの東アジア・東南アジアからの輸入陶磁器の研究は、圧倒的に量が多い中国陶磁がその中心となっているが、「陶磁の道」を運ばれた陶磁器は中国陶磁ばかりではない。安南の黒褐釉陶器、タイのサワンカロークの青磁も運ばれていたし（三上1969：50）、ミャンマーの青磁も運ばれていた（佐々木他2019）。さらに清朝の海禁政策下の17世紀後半には日本の肥前磁器もまた東アフリカに運ばれていた（野上2008、野上他2019）。

よって、本研究ノートではとりわけオマーン支配下における陶磁器受容、日本磁器の受容の二つのテーマに重きを置きながら、報告を進めたいと思う。

３．2019年の調査日程と調査地

調査は2019年４月24日～５月５日にかけて行った。４月24日に日本を出国し、イスタンブルを経由して26日にタンザニアに入国した。そして、５月４日にタンザニアを出国して ５日に帰国した。その間、４月28日から５月１日にかけてケニアの調査を行った。なお、往路にトルコのイスタンブルに寄航し、トプカプ宮殿の陶磁器コレクション、装飾タイル博物館のイスラーム陶器のコレクションを見学した。

ダルエスサラーム Dar es Salaam では、Amandus Kwekason 氏のご協力でダルエスサラーム国立博物館の収蔵庫で、タンザニア国内の遺跡から出土した陶磁器調査を行った。

ケニアではモンバサを起点に海岸線を北上しながら、いわゆるスワヒリ都市遺跡を訪ねて調査を行った。調査地は、南からモンバサ Mombasa（フォート・ジーザス博物館）、ムトワッパ Mtwapa、キリフィ Kilifi、ゲディ Gede、マリンディ Malindi、マンブルイ Mambrui である。フォート・ジーザス博物館では Farma S.Twahir 女史や Aisha Fadhil 女史、ゲディ博物館では Mbarak Abdulqadir 氏のご協力を得ることができた。

４．タンザニアの遺跡と陶磁器

ダルエスサラームの国立博物館（図３～５）には、タンザニア各地の遺跡の考古資料が保管展示されている。展示資料についてはすでに報告を行っているので、今回は収蔵庫に保管されている出土陶磁器の一部を紹介する。紹介する遺跡や都市はキシジュ Kisiju、クンドゥチ Kunduchi、ウィンデ Winde、バガモヨ Bagamoyo、ダルエスサラーム Dar es Salaam、マフィア Mafia、キルワ・キシワニ Kilwa Kisiwani である（図２）。

4-1　キシジュあるいはクンドゥチ（クンダッチー）

収蔵庫の棚のラベルには、クンドゥチとあったが、遺物の保管袋にはキシジュのカードが入っていたため、いずれかの遺物とみられる。いずれもインド洋に面したタンザニア東海岸の町であるが、キシジュはダルエスサラームの南66km、クンドゥチはダルエスサラームの北18km の位置にある。クンドゥチの遺跡にはモスクや墓地が残り、その中には18～19世紀の中国青花を埋め込んで装飾とした柱墓（柱塔墓）もある。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているキシジュあるいはクンドゥチ採集磁器は、龍泉窯の青磁、元の青花碗、明代の景徳鎮の青花碗・皿のほか、18～19世紀の清代の青花や色絵が多い。鋸歯状の花弁をもつ唐花唐草文を描いた高台内無釉皿、双喜（囍）文碗、寿字文印青花碗、山水文壺などの青花製品、赤と緑の絵具で文様を施した色絵の碗・皿などがある（図６～10）。

4-2　ウィンデ

ダルエスサラームの北方に位置する海岸沿いの集落である。18世紀から19世紀にかけての遺跡がある。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているウィンデ採集磁器は、明代の青花唐草文碗、17～18世紀の高台無釉の瑠璃釉碗、18～19世紀にかけての福建・広東地方の青花や色絵などがある（図11～13）。清代の青花は唐花唐草文皿、内側面に梵字を描き詰めた皿、仙芝祝寿文碗、梵字碗などがあり、色絵は赤絵具を主体とした碗がある。

4-3　バガモヨ

ダルエスサラームの北西57km に位置する。町の郊外には13世紀頃の都市国家遺跡のカ

オレ遺跡があり、モスク跡や墓などが残る。22基の墓の内、8基の墓が柱をもつ柱墓（柱塔墓）である。龍泉窯の青磁盤などが出土している（野上ほか2019）。

そして、19世紀には奴隷の主たる積み出し港として台頭したキルワ・キヴィンジェに対し、象牙の主要な積み出し港として急速に発展したのがバガモヨであった（富永2009：140）。オマーン支配の拠点のザンジバルに最も近い港であり、内陸交易の重要な中継基地であったからである（富永2008：72）。やがて1870年代に沿岸部のプランテーションにおける奴隷の需要が高まると、バガモヨでも盛んに奴隷の取引が行われるようになった。そして、1880年代からドイツ領東アフリカとなると、その首都となった。それはダルエスサラームに移転するまで続き、その後は衰退していった。現在では海岸近くに当時の奴隷貿易の集積地跡・倉庫跡、旧税関事務所、総督府などが残り、かつての繁栄の影がみられるのみである。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているバガモヨ採集磁器は、18～19世紀の中国青花、色絵が主体である（図16）。青花は唐花唐草文皿、見込みに寿字、内側面に梵字を描き詰めた皿、仙芝祝寿文碗、双喜（囍）文碗などがあり、それらの中には印青花もみられる。色絵は赤と緑の絵具で文様を描いた皿がみられる。重ね積みを行うために内面を蛇の目状に釉を剥いだ部分に主に緑色で着色し、見込み中央と内側面に赤絵具で文様を描いたものである。

4-4　ダルエスサラーム

タンザニアのかつての首都であり、今なお実質的な首都として機能しているタンザニア最大の都市である。19世紀にザンジバルのスルタンが建設し、離宮が置かれた。19世紀末にドイツ領東アフリカの首都がバガモヨから移された。第一次世界大戦後には敗戦したドイツに代わりに、イギリスが支配するようになり、タンガニーカの政治経済の中心となった。独立後はタンザニア連合共和国の首都となった。1973年には法律上の首都は内陸部のドドマに移されるが、機能的には現在もダルエスサラームが担っている。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているダルエスサラーム採集磁器は、大半が18～19世紀の青花や色絵製品である（図14・15）。仙芝祝寿文碗、双喜（囍）文碗、唐花唐草文碗、内側面に梵字を描き詰めた皿などがある。

4-5　マフィア

マフィアはルフィジ川河口の沖合18kmに浮かぶマフィア島の南部に位置する都市である。ダルエスサラームの南方約126kmに位置し、マフィア島は、ウングジャ島やペンバ島とともにザンジバル諸島を構成している。イギリスのフリーマン・グレンヴィルが1950年代にタンザニアの海岸だけでも46の中国陶磁を出す遺跡を見つけたと報告しており（三上1969：47)、その中にマフィア島も含まれている。アジアとアフリカの間の海上交易の拠点として機能したが、1890年にドイツが支配することとなり、第一次世界大戦の時にはイギリスが占領している。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているマフィア採集磁器については小片が多いが、18～19世紀の青花が主体とみられる（図17)。

4-6　キルワ・キシワニ

ダルエスサラームの南240kmに位置する海岸近くのキルワ島に建設されたスワヒリ都市遺跡である。12世紀後半頃には金の交易などによって繁栄し、14世紀には成熟期を迎えている。1331年に東アフリカを訪れたタンジャ（モロッコ）生まれのアラブ人イブン･バットゥータは、著書『大旅行記』でキルワについて「世界でもっとも美しい町」と称賛し、その景観や繁栄ぶりを描写している。

しかし、15世紀末のポルトガルの東アフリカ到達とともに、その繁栄は終焉へと向かうことになる。そして、1505年にはアルメイダ提督率いるポルトガル艦隊によって攻略されて破壊され、その後は衰退の一途をたどった。1569年に同地を訪れたイエズス会の神父は「かつて町には、人々があふれ繁栄していたが･･･今は貧しく、権力も失われてしまった。」と書いている（富永2009：125)。

ダルエスサラーム国立博物館に収蔵されているキルワ・キシワニ採集磁器は、蓮弁文や鎬文などが入った青磁製品、元・明代の青花製品が主体であるが、清代の唐花唐草文皿や梵字文印青花皿などもみられる（図18～28)。

5．ケニアの遺跡と陶磁器

ケニアでは、モンバサからマンブルイまでの間の海岸沿いのスワヒリ都市遺跡などを踏査し、出土した陶磁器などを調査した。モンバサを起点にそれらを南から順に辿ることに

する。

5-1　モンバサ Mombasa（フォート・ジーザス博物館）

ナイロビの南東440km、キリマンジャロの東南東280km の海岸に位置する。アフリカ内陸部との象牙交易と、その象牙を対価としたインド洋交易で栄えたスワヒリ都市である。15世紀末のモンバサは人口約１万を数えたという（富永2009:125）。そして、ヴァスコ・ダ・ガマ率いる船団がモザンビーク島を経由して、モンバサ島の沖合に現れた。これはヨーロッパとスワヒリ世界との直接的な接触となった。ポルトガル人はモンバサ島で食料と水先案内人の確保を目論んだが、失敗に終わり、後述するマリンディでその確保に成功し、インドのカリカットに到達している。ポルトガルに協力的であったマリンディと異なり、モンバサはポルトガルに抵抗を続けることとなる。1505年にはアルメイダ提督によって攻撃され、壊滅的打撃を受けるが、その後、繁栄を取り戻した。さらに東アフリカへの進出を目論むオスマン帝国の船が、救援を求めるスワヒリ沿岸住民の要望に応える形でモンバサに来航したが、ポルトガル軍はこのモンバサ－オスマン連合軍を打破した（富永2009：126）。そして、1593年に要塞「フォート・ジーザス」（図29）を建設し、スワヒリ沿岸部におけるポルトガルの拠点がマリンディからモンバサへと移された。その後、東アフリカにおけるポルトガルの軍事的優位が半世紀ほど続くが（富永2008：40）、1631年にはモンバサの住民が反乱を起こし、その蜂起は他のスワヒリ諸都市にも波及することとなった。そして、スワヒリ都市からの援軍要請を受けたオマーン王国の艦隊によってポルトガル勢力は東アフリカから駆逐された。1698年のことである。以後、オマーン王国による支配が始まった。

フォート・ジーザス内にある展示施設には、モンバサ沈没船の遺物（図30～32）、モンバサおよび周辺で出土した遺物、伝世した製品などが展示されている（図34～41）。屋外には東アジアとは異なるタイプの碇石も展示されている（図33）。

モンバサ沈没船は1681年にインドで建造され、1697年10月20日にモンバサ沖に沈んだサント・アントニオ・デ・タンナ号 Santo Antonio de Tanna の遺跡である。出土している中国の陶磁器の中には褐釉四耳壺、葉文の青花皿などが含まれる（図31）。葉文の青花皿は、1690年代にベトナムのコンダオ沖で沈んだ船から類品が数多く出土しており、17世紀後半に盛んに生産された製品である。質はあまりよくない。

モンバサおよび周辺で出土した遺物、伝世した製品は、おおよそ時代順に展示されている。越州窯の青磁（図34）、龍泉窯の青磁碗や大皿（図35･36）、景徳鎮の明清代の青花皿（図

38）や五彩碗、清代の景徳鎮の色絵皿、褐釉掛分碗、鼻煙壺、青花洋食器、福建広東地方の青花大皿や印青花の大碗などがある（図39～41）。中国以外では18世紀初めの肥前の色絵大壺（図37）、幕末から明治にかけての日本の色絵製品、ゴム印で山水文が施文された大正から昭和にかけての染付碗なども展示されている（図39～41の一部）。肥前の色絵大壺は、キャプションによるとJ.C. White女史がモンバサで入手し、寄贈されたものという。

また、収蔵庫にはフォート・ジーザスで出土した陶磁器が保管されている。一部は中国国家博物館水下考古研究中心らによって報告されている（中国国家博物館水下考古研究中心ほか2012）。元代の青花碗、明代の青花碗・皿、清代の仙芝祝寿文碗や唐花唐草文碗、梵字文碗など多数の磁器片がある（図42）。中国国家博物館水下考古研究中心らによる報告に中国磁器として掲載されている陶磁器片の中に1点のみ肥前磁器の染付芙蓉手皿片がみられるが（図43）、現地で確認することはできなかった。

5-2　ジュンバ・ラ・ムトワナ Jumba La Mtwana 遺跡

モンバサから海岸線に沿って北約15kmに位置するムトワッパMtwapaという町にある遺跡である（図44･45）。スワヒリ語で「奴隷の大きな家」という意味だという。1972年にジェイムス・カークマンによって発掘調査が行われている。遺跡にはモスク、墓、家屋の遺構が残り、家屋の遺構には、「円柱の家」、「台所の家」、「多くのプールの家」などとよばれる建物遺構が含まれる。モスク遺構の数から住民の多くがイスラーム教徒であったことがわかる。町の記録は存在しないが、考古資料により14世紀に建設され、15世紀の早い段階には放棄されたと推定されている。出土資料に15世紀初頭以前の初期の染付（青花）や龍泉窯の青磁が見られるものの、以後の時代の中国磁器が見られないからである。

遺跡に併設されている博物館には、出土した龍泉窯の青磁片（図46）の他、付近の地域で伝世していたとみられる18～19世紀の清朝の青花皿や壺などが展示されている（図47・48）。

5-3　ムナラニ Mnarani 遺跡

モンバサから海岸線に沿って北へ50kmに位置する。三上の『陶磁の道』では、「キリフィ Kilifi の廟」とも書かれている遺跡である（図49・50）。14世紀初めに居住が始まったが、最初のモスクである大モスク（the Great Mosque）が建造されたのは1425年のことである。遺跡には二つのモスクと墓の一群が残っている。17世紀初頭にはガラ族によって破壊され

た遺跡である。

三上の著書には、アーチ状の建造物に中国磁器がはめ込まれている「キリフィの廟」(図51)と明代後期～末期の鹿文芙蓉手の青花皿の写真が掲載されている(三上1969:52)。カークマンの論文を引用したものである。現在、中国磁器はすでに取り除かれている。

5-4　ゲディ Gede

モンバサから海岸線に沿って北約90km に位置している。ゲディ遺跡は東アフリカのアンコール・ワットともよばれている(図52～56)。12世紀に築かれた町であり、キルワの人々のモンバサやマリンディなど海岸の町への移住に伴い、15～16世紀に新しく城壁が造られた。壮大な宮殿やモスク、数多くの住居跡が当時の繁栄を物語っている。15世紀に最盛期を迎えるが、16世紀末には隣の町からの攻撃やガラ族の襲撃により、17世紀前半には町は放棄されている。

このゲディ遺跡の発掘調査を行ったのはジェームス・カークマンである。発掘調査では、中国の南宋の寧宗（1195-1225）時代の慶元通宝や理宗（1225-1265）時代の紹定通宝などとともに数多くの中国磁器が出土している（三上1969：51)。

遺跡に併設された博物館にはゲディ遺跡や東アフリカ沿岸の遺跡で出土した陶磁器が収蔵されている（図57～66)。宋元代の白磁、龍泉窯の青磁広口壺や蓮弁文や鎬文の入った青磁碗、元代の青花碗や大皿、明代の青花碗や皿、明代後期の鹿文芙蓉手の青花皿などがある。

5-5　マリンディ Malindi

モンバサから海岸線に沿って北約100km に位置する町であり、かつてはインド洋交易で栄えたスワヒリ都市である（図67・68)。15世紀前半に明の永楽帝が派遣した鄭和の大艦隊は、第３回（1413年)・第４回（1417年)・第５回（1421年）の航海で東アフリカまで到達しているが、艦隊が訪れた東アフリカ沿岸の都市として「木骨都束」や「麻林」などの名前がみられる。前者に比定されているのがモガディシオで、後者がマリンディである。また、1498年に喜望峰を回り、東アフリカに到達したヴァスコ・ダ・ガマがインド洋を航海するための水先案内人を得た町としても知られている。当時、マリンディはモンバサと対立関係にあったこともあり、抵抗を続けたモンバサとは異なり、ポルトガルに協力的であった。しかし、ポルトガルはフォート・ジーザスを建設し、モンバサに税関を設置する

とともに、マリンディ王を呼び寄せ、モンバサの統治にあたらせた（富永2009：127）。スワヒリ沿岸部における拠点がマリンディからモンバサに移ったことで、マリンディは衰退していった。その後、すっかりさびれてしまっていたが、19世紀になるとザンジバル島やアラビア半島向けの穀倉地帯として復興を遂げることとなった（富永2009：139）。

港近くにあるジャミア・モスク Jamia Mosque（図71）に隣接する墓地（図72）に高さ９ｍの柱墓が残る（図69）。墓を取り囲む低い塀の外壁には陶磁器が埋め込まれたと思われる凹みが並んでいるが、陶磁器自体はすでに取り除かれている（図70）。

5-6　マンブルイ Mambrui

モンバサから海岸線に沿って北へ約120km に位置する町である。塀に囲まれた墓地の中には柱墓（柱塔墓）が残る（図73・74）。墓地の周辺の発掘調査では、鉄の精錬所、スラグ、明代初期の青磁片、「永楽通宝」が出土している。柱墓（柱塔墓）に埋め込まれた磁器はいずれも中国磁器であり（図75）、その内訳は４点の青花皿と１点の青磁碗である。青花は明代後期～末期の蓮池水禽文皿（図76）、鳳凰文皿（２点）（図77・78）、鹿文皿（図79）などがある。本来、青花皿は柱墓の外側をめぐるように９～10点、間隔を置いてはめ込まれていたとみられる。青磁碗は柱墓の頂部にはめ込まれている（図80）。

６．討論

東アフリカの遺跡と陶磁器について、本研究ノートでは、三つのテーマについて取り上げたい。その内の二つは前に述べたオマーン支配下における陶磁器受容、日本磁器の受容についてである。ここではそれらに加えて柱墓（柱塔墓）をあげる。

6-1　東アフリカの柱墓（柱塔墓）

スワヒリ都市の遺跡で特徴的なものの一つは、柱墓（柱塔墓）である。スワヒリの港湾都市の遺跡から13世紀の石造りのモスクの遺構などが発掘されるが、中国製の皿をはめこんだ柱墓（柱塔墓）が建てられるようになったのも13世紀頃という（富永2009：115）。陶磁器自体、インド洋交易でもたらされたものであり、イスラームの建築文化や東アジアの物質文化などの外来文化の影響により成立したものと考えられる。

ジェームズ・カークマンが20数カ所に残る柱墓（柱塔墓）について調べていることを紹

介しながら、三上は陶磁器をはめ込む装飾を持つ柱墓（柱塔墓）について「東アフリカ地域に住む土着民のなまの実存的な美意識の影響」とともにイスラーム文化の壁面装飾の影響とみている（三上1969：56）。また、富永は「沿岸部土着の様式に、インド洋交易をとおして伝えられた物質文化が融合したものであり、スワヒリ文化のアフリカ的展開を象徴している」と考えている（富永2009：116）。

また、東アフリカで陶磁器を埋め込んで装飾とする例は、墓だけでなく、キルワ・キシワニなどの遺跡で見ることができるようにモスクの壁や天井部の装飾にも用いられている。ダルエスサラームでは住宅の内壁にも埋め込まれた例があり、広く建築物の装飾に利用されている方法である。マンブルイの柱墓に埋め込まれた中国磁器を見ると、文様の天地は考慮されていないので、文様の意味は特に重要ではなく、光沢のある器面と青と白の色彩の美しさに意味があったのであろう。その意味ではイスラームの壁面装飾に用いられる施釉タイルと性格的には近い。

東アフリカ以外で陶磁器を建築の装飾用に使う例として、三上はタイの15世紀ごろのアユディア時代の城門に陶磁器をはめこんで飾ったものや北ボルネオのサラワクのクチンの柱墓の例をあげている（三上1969：56）。いずれもイスラームの影響としている。

さらに範囲を広げると、メキシコのカサ・デル・リスコの中庭の噴水施設の装飾、コロンビアのトゥンハの教会群にも陶磁器をはめこんだ装飾がある。いずれもかつてスペインの植民地である。比較するには、年代も地域も大きく異なるが、スペインのあるイベリア半島はイスラームの支配下にあった地域であり、イスラームの影響がスペインを経由して中南米に伝わった可能性が考えられる。同じイベリア半島のポルトガルのリスボンにあるサントス宮殿「磁器の間」の天井装飾も共通の文化土壌をもつものかもしれない。

確たる証拠を示せるわけでもなく、また陶磁器を外面一面に貼り付ける例は、タイの仏教寺院であるワット・アルンなどにも見られ、必ずしも全てがイスラームに起源を持つものばかりではないかもしれないが、陶磁器を埋め込んだ柱墓（柱塔墓）の成立について、今のところ、イスラームの影響以外に他に説得力のある考えは見当たらない。

6-2　東アフリカに運ばれた日本陶磁

東アフリカにもたらされた日本陶磁は、17世紀後半～18世紀前半の肥前磁器、19世紀中頃～後半の日本磁器（有田、薩摩、九谷、瀬戸など）、20世紀の日本磁器及び硬質陶器、タイルなどがある（野上2008、野上ほか2019、川畑2018、増田ほか2019）。今回の調査で

確認された日本陶磁は全てモンバサのフォート・ジーザス博物館のコレクションである。18世紀初の有田の色絵大壺、幕末～明治期の色絵皿や鉢、大正～昭和期の染付碗（ゴム印判）などである。

ここでは17世紀後半～18世紀前半の肥前磁器を取り上げ、東アフリカまでの流通ルートについて考えてみたい。

これまで東アフリカで発見されている肥前磁器はケニア２点、タンザニア１点の計３点である。すなわち、ケニアのモンバサのフォート・ジーザス出土の17世紀後半の染付芙蓉手皿、モンバサ伝世の18世紀前半の色絵（金襴手、染錦）沈香壺、タンザニアのキルワ・キシワニの「スルタンの墓」発見の17世紀後半の染付芙蓉手皿である。

まず17世紀後半の流通ルートを考えてみよう。インド洋交易でもたらされた肥前磁器のコレクションの一つがトルコのイスタンブルのトプカプ宮殿に残る肥前磁器のコレクションである。このコレクションについて、大橋は1655～1670年代の肥前磁器はオランダなどヨーロッパでは見られないものであることから、紅海あるいはペルシア湾ルートと考え、さらにオランダの記録で、トルコ商人が取引に関わっているのはモカだけであることから、モカつまり紅海から入った可能性が強いとしている（大橋1995：121）。つまり、東南アジアからインド洋を横断して紅海に入り、イスタンブルにもたらされたと考えるのである。17世紀後半の肥前磁器の輸入ルートが紅海であることについては、筆者も同様の考えをもつが、提示した仮説でも述べたようにその担い手はオランダ船に限るものではないと考える。唐船が長崎から東南アジアの港市（バタビアなど）に輸出したものをイスラーム商人が紅海を経て、イスタンブルに運んだ可能性を考えることができる。エジプトのフスタートで発見されている17世紀の肥前の色絵碗も同様の担い手とルートではないかと推定される。

それでは東アフリカはどうか。17世紀後半の東アフリカはポルトガル支配下であった。そのため、肥前磁器をもたらした担い手がポルトガル人であった可能性は十分考えられる。東アジアのポルトガル人の居留地であるマカオでも同種の肥前磁器は出土しているし、1697年にモンバサ沖で沈んだポルトガル船にも同じ東アジアの磁器である中国青花が積まれており、ポルトガルによるインド洋交易の中で肥前磁器も運ばれた可能性を考えることができる。一方、当時のインド洋交易を行なっていたのはポルトガルだけではない。東アフリカの沿岸地域はポルトガルの支配下に置かれたが、前に述べたようにインド洋各地で活動していた在地の商人たちもポルトガルから許可証をもらい港で関税を支払えば、制約

はあったものの、通商活動を許されており、在地の人々によるインド洋交渉が途絶えた訳ではなかった（福田2018：248）からである。そのため、17世紀後半のモンバサもキルワ・キシワニもポルトガル支配下であったが、イスラーム商人なども肥前磁器をもたらした担い手であった可能性も考えられる。とりわけキルワ・キシワニの染付芙蓉手皿は「スルタンの墓」で発見されているからである。

続いて17世紀末にポルトガル勢力は東アフリカから駆逐され、それ以降はオマーン支配下に入る。18世紀のインド洋における陶磁器貿易の実態を示す資料の一つにサダナ沖沈没船がある。紅海のサダナ島沖で発見されているイスラーム商人の船と推定される18世紀の沈没船には、いわゆるバタヴィアンウェアとよばれる褐釉掛分のコーヒーカップや唐花唐草文の青花皿、色絵大碗などの中国磁器が積載されていた（Bass 2005）。おそらくこれらも東南アジアで入手されたものが紅海まで運ばれたのであろう。トプカプ宮殿に残る同時代の中国磁器のコレクションの主要な流入ルートであったと考えている。一方、前述のトプカプ宮殿の肥前磁器のコレクションの主たる18世紀前半の作品については、大橋はヨーロッパに輸出された肥前磁器の特色と同様であることから、オランダ本国を経由して入ったとしている。オランダ連合東インド会社によって長崎からオランダへ運んだものの一部とする考えである（大橋1995：122）。つまり、中国磁器とも17世紀後半の肥前磁器とも異なり、インド洋を横断して直接運ばれたのではなく、ヨーロッパを経由して運ばれたとする考えである。しかし、モンバサに残る18世紀前半の有田の色絵大壺は、中国磁器と同様に従来のインド洋交易による肥前磁器の流通が継続していた可能性を示している。この色絵大壺は年代的にオマーン支配下にモンバサにもたらされた可能性が高いが、その場合、喜望峰を回ってオランダにたどり着いたものが、中東のペルシア湾や紅海を経て（すなわち、アフリカ大陸を周回するような形で）再びインド洋に持ち出され、東アフリカのモンバサにたどり着いたとはやはり考えにくい。オランダ船などによって東南アジアのバタビアなどの港市に運ばれた肥前磁器がイスラーム商人の船で東アフリカに直接運ばれた可能性が高いと考える。またオランダ船だけでなく、唐船によっても運ばれていたかもしれない。例えば、享保３年（1717）から享保８年（1723）にかけて清が再び海禁を行った際には、唐船が毎年大量の肥前磁器を輸出している。唐船による陶磁器貿易の商品の主体が展海令によって中国磁器に立ち戻った後も肥前磁器をなお扱っており、その一部がインド洋において流通した可能性も考えてよいと思う。

インドネシアにおいてもイスラームのブトン王国のウォリオ城の出土品、チルボンのイ

スラームの聖人廟にはヨーロッパ向けの色絵大壺がみられる。トプカプ宮殿のコレクションの中にもみられるため、オランダがヨーロッパ向けに注文したものではあるが、イスラーム世界に一定の需要があったとみられる。ヨーロッパ輸出とは別のアジア貿易、インド洋貿易による肥前磁器の流通を考える上で、東アフリカのフィールドは重要であると思う。

6-3 オマーン支配下にもたらされた中国磁器

オマーン支配下の東アフリカに運ばれた主な中国磁器は、印青花の大碗、梵字文碗、仙芝祝寿文碗、双喜（囍）文碗、花弁を鋸歯状に描いた唐花文皿、梵字文皿などである。15世紀の早い段階で放棄されたジュンバ・ラ・ムトワナ遺跡や17世紀前半には町が破壊されたゲディ遺跡などを除けば、ほとんどの遺跡でこれらの全てあるいは一部の種類の製品が採集されている。今回の調査以外でもザンジバルでは全ての種類の製品が海岸で採集されており（野上2020）、モガディシオでは花弁を鋸歯状に描いた唐花文皿が採集されている（三杉1986）。また、考古資料だけでなく、民俗資料としても多く残されている。年代的な遺存率の差を考慮しなければならないが、前代までに比べて相当な輸入量の増加がみられる。

その理由の一つは、インド洋とアフリカ内陸との交易が起爆剤となったスワヒリ都市の発展である。内陸の物資の積み出し港となった都市では数多くの磁器が発見されている。前にも述べたように、オマーン支配下のスワヒリ沿岸部では、サイード王とその後継者が力を注いだ経済活動の展開に伴い大きく変化した。つまり、オマーン支配がもたらした経済効果によって、多くの商品が輸入されたと考えられる。サイード王の在位期間は1856年に亡くなるまでの約半世紀の間であり、採集される陶磁器の主たる年代に合致する。

一方、この時期に磁器の使用が一般化していくのは東アフリカに限った話ではない。日本でも18世紀にいわゆる「くらわんか」碗・皿が生産され、さらに19世紀には磁器生産技術が全国に広がり、磁器が特定の地域の特産品ではなく、全国各地で生産される日用品として広まっていった。東南アジアでも清朝の海禁政策の反動で、福建・広東など中国南部の製品を中心とした中国磁器が大量に流入している。その他、ヨーロッパで生産された工業製品としての磁器が広く流通するようになった。軟質磁器あるいは硬質陶器も含めて、白くて清潔なやきものが世界各地の食卓に並ぶようになったのである。東アフリカにおける中国磁器の大量輸入も世界的な現象の一側面とみることができる。ただし、世界的な現象であっても地域性は存在している。日本を含めた東アジアに見られる製品は、印青花の大碗、梵字文碗、仙芝祝寿文碗、双喜（囍）文碗などであり、花弁を鋸歯状に描いた唐花

文皿、梵字文皿などはあまりみられない。一方、東アフリカやアラビア半島などの地域では花弁を鋸歯状に描いた唐花文皿、梵字文皿が普遍的に見られる。食生活の違いが器種や器形の違いとなって現れているのであろう。

最後にオマーン支配以後、すなわち、19世紀末以降のヨーロッパ列強の植民地支配下について触れておこう。19世紀末以降の輸入陶磁器の主体はヨーロッパ製の硬質磁器や軟質磁器である。前にあげた花弁を鋸歯状に描いた唐花文皿を模倣した軟質磁器が輸入されるが、輪郭を描かず、赤、青、緑などの鮮やかな絵具を筆で大胆に花卉を描いた深皿が普遍的に見られるようになる。そして、それらは20世紀中頃になると日本で「硬質陶器」として模倣され、東アフリカに運ばれている。

7．おわりに

東アフリカについて、『陶磁の道』の中では「中国陶磁研究の新しいフィールド」と書かれている（三上1969）。ちょうど半世紀前の出版であるが、今もなお新しいフィールドと言ってもよいかもしれない。特に17世紀末以降のオマーン支配下の時代に輸入された中国磁器についての研究はあまりなく、資料が豊富であるがゆえに大きな可能性を有している。

近年、オマーン本国のあるアラビア半島における発掘調査事例が増えている。例えば、佐々木はオマーン湾岸のコールカルバ、コールファッカン古町、ディバ、シャルジャのアル・ヒッサンで16世紀から20世紀にかけての遺跡調査を続けており、その中でこれまで研究対象とされることが少なかった18～19世紀にかけての生活の復元やモノの交流について明らかにしている（佐々木・佐々木2017、2019）。アラビア半島あるいはインド洋の東側にある東南アジアなどの地域と比較しながらの生活史や交流史の復元は重要な作業となる。

また、インド洋の海上交易や文化交流の視点だけでなく、東アフリカのスワヒリ沿岸都市と内陸部との交易を陶磁器から描き出すこともできるかもしれない。内陸から沿岸へ奴隷や象牙が運ばれ、アラビア半島やインドに向けて積み出されていったが、その対価品としての手工業製品に陶磁器も含まれていた可能性は高い。内陸部の遺跡における陶磁器の出土状況は明らかにすることも今後の課題である。

そして、中国以外の陶磁器の輸入状況も重要な課題であるが、確認されているものはとても少ない。タイの鉄絵、ミャンマーの青磁、黒褐釉壺、肥前磁器などが少量確認されて

いる程度である。佐々木はオマーン湾岸のディバでは17世紀後半の出土品がほとんど出土しないことを指摘し、中国の海禁政策と関わりのある可能性を示している。東アフリカでも17世紀後半の肥前磁器はわずか２点の発見にとどまっており、明末清初の磁器や康熙年間の清朝磁器も少ない。海禁政策下に中国磁器の代わりに肥前磁器が運ばれ、それに続く康熙年間の清朝磁器が数多く輸入された中南米とは状況が異なるようである。しかしながら、考古資料としては乏しいものの、オランダ東インド会社のインド各地の商館やペルシア商館、モカ商館などインド洋海域の商館に向けて大量に肥前磁器が輸出された記録があり、トプカプ宮殿にも紅海を経由して運ばれたと推定される17世紀後半の肥前磁器が残っている。さらに「資料性ではいささか落ちる点がある」（三杉1986：144）という断りつきであるが、ベイルートで発見された４点の肥前磁器の染付芙蓉手皿[1]の存在など、インド洋海域においても17世紀後半に肥前磁器が広く扱われていた可能性を示している。

謝意

本研究にあたっては、多くの方々のご協力、ご教示を得た。芳名を記して謝意を示したい。

鈴木重治、Amandus Kwekason、Farma S.Twahir、Aisha Fadhil、Mbarak Abdulqadir（順不同、敬称略）

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375の助成を受けたものです。

引用・参考文献

大橋康二1995「オスマン・トルコ帝国の盛衰と東洋陶磁」『トプカプ宮殿の名品－スルタンの愛した陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館

川畑容2018「欠片から視るストーンタウンでの食器の変遷」『現代ザンジバルにおける社会の動態－ローカルリティとグローバル化のフィールドワーク』長崎大学多文化社会学部　pp.162-179

佐々木達夫・佐々木花江2017「オマーン湾岸の港町・ディバ海岸町跡の発掘－2008～2016－」『金沢大学考古学紀要』第38号　pp.1-46

佐々木達夫･佐々木花江2019「オマーン湾岸コールファッカン西砦出土の陶磁器」『金沢大学考古学紀要』第40号　pp.77-103

佐々木達夫・野上建紀2019「インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁」『多文化社会研究』第５号　pp.205-217

鈴木重治1989「ケニア・タンザニア出土の中国陶磁―1987 年度の調査から－」『貿易陶磁研究』No.9　pp.76-88

鈴木重治2018「タンザニア・キルワ遺跡出土の元染―大航海時代のラマ式蓮弁文－」『中近世陶磁器の

[1] シリアのダマスカスからレバノンのベイルートに移されたコレクションの一部という（三杉1986：145）。

考古学』第８巻　雄山閣 pp.293-331
富永智津子2008『スワヒリ都市の盛衰』世界史リブレット103 山川出版社
富永智津子2009「第二章　東アフリカ沿岸部・スワヒリの世界」『新版アフリカ史』世界各国史10（川田順造編）山川出版社　pp.106-151
野上建紀2008「アフリカに渡った伊万里」『アフリカ研究』72号　pp.67-73
野上建紀2020「ザンジバルにおける海岸採集磁器」『貿易陶磁研究』（掲載予定）
野上建紀・佐々木達夫・金城康哉2019「東アフリカの遺跡と陶磁器－クラウドファンディングによる教育研究実践の一実例－」『多文化社会研究』第５号　pp.189-204
福田安志2018「第八章　インド洋交渉史」『改訂新版　新書アフリカ史』講談社現代新書2503（宮本正興、松田素二編）　pp.234-272
増田研・深井明比古2019「ザンジバルにおける日本製タイルの流通と利用－タイル考古学的アプローチ－」『多文化社会研究』第５号　pp.29-53
三上次男1969『陶磁の道 - 東西文明の接点をたずねて -』岩波新書　岩波書店
三杉隆敏1986『世界の染付６』同朋社出版

Bass, George F. 2005. *Beneath the Seven Seas, Adventures with the Institute of Nautical Archaeology*. Thames & Hudson.
中国国家博物館水下考古研究中心・肯尼亜国立博物館沿海考古部2012「2010年度中肯合作肯尼亜沿海水下考古調査主要収獲」『考古学研究』第109期　中国国家博物館

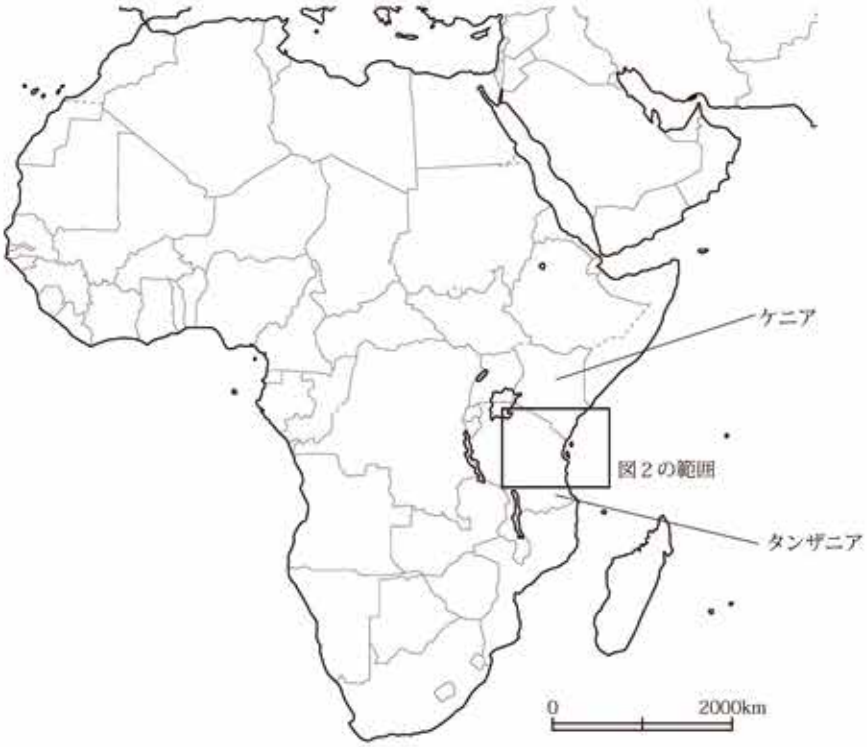

図１　アフリカ大陸におけるケニア・タンザニア位置図

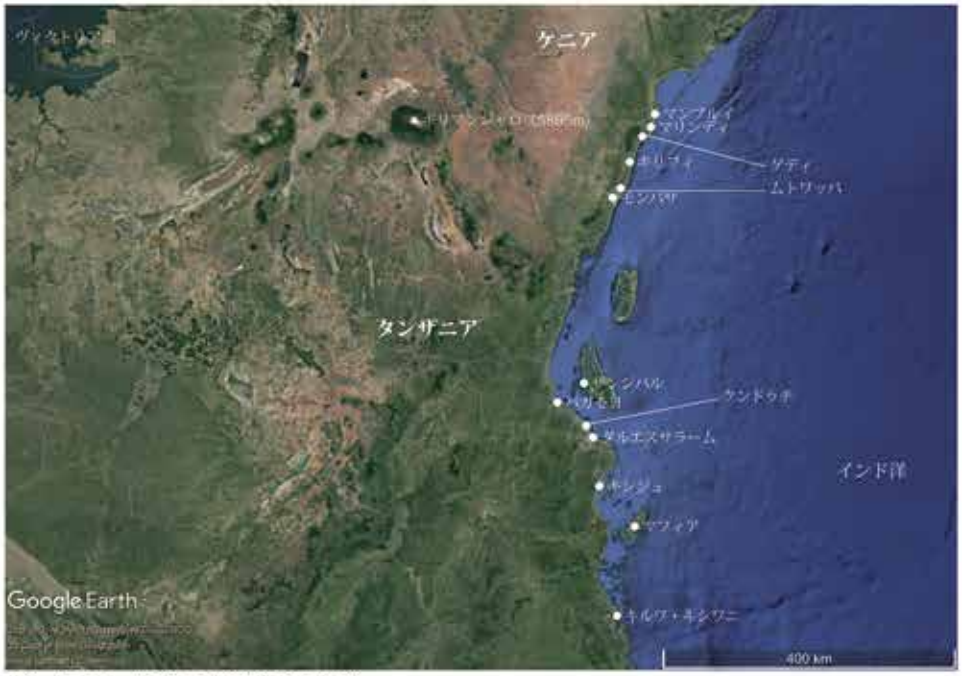

図２　ケニア・タンザニア東海岸と主な遺跡

図3　ダルエスサラーム国立博物館（外観）

図4　ダルエスサラーム国立博物館（中庭）

図5　ダルエスサラーム国立博物館（収蔵庫）

図6　キシジュ（あるいはクンドゥチ）採集遺物（1）

図7　キシジュ（あるいはクンドゥチ）採集遺物（2）

図8　キシジュ（あるいはクンドゥチ）採集遺物（3）

図9　キシジュ（あるいはクンドゥチ）採集遺物（4）

図10　キシジュ（あるいはクンドゥチ）採集遺物（5）

図6～10（Courtesy: National Museum of Tanzania）

図 11　ウィンデ採集遺物（1）

図 12　ウィンデ採集遺物（2）

図 13　ウィンデ採集遺物（3）

図 14　ダルエスサラーム採集遺物（1）

図 15　ダルエスサラーム採集遺物（2）

図 16　バガモヨ採集遺物

図 11 ～ 16（Courtesy: National Museum of Tanzania）

図 17　マフィア採集遺物

図 18　キルワ・キシワニ採集遺物（1）

図 19　キルワ・キシワニ採集遺物（2）

図 20　キルワ・キシワニ採集遺物（3）

図 21　キルワ・キシワニ採集遺物（4）

図 22　キルワ・キシワニ採集遺物（5）

図 23　キルワ・キシワニ採集遺物（6）

図 17 ～ 23（Courtesy: National Museum of Tanzania）

図 24　キルワ・キシワニ採集遺物（7）

図 25　キルワ・キシワニ採集遺物（8）

図 26　キルワ・キシワニ採集遺物（9）

図 27　キルワ・キシワニ採集遺物（10）

図 28　キルワ・キシワニ採集遺物（11）

図 24 ～ 28（Courtesy: National Museum of Tanzania）

図 29　フォート・ジーザス

図 30　モンバサ沈没船資料（フォート・ジーザス博物館）

図 31　モンバサ沈没船資料（フォート・ジーザス博物館）

図 32　モンバサ沈没船資料（フォート・ジーザス博物館）

図 33　碇石（フォート・ジーザス博物館）

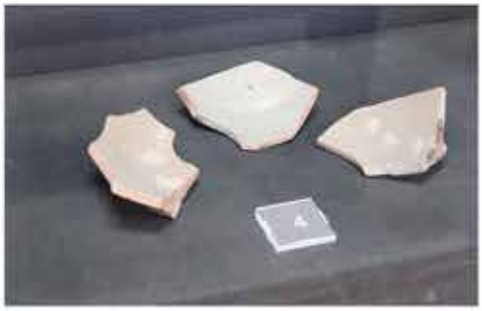

図 34　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（1）

図 35　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（2）

図 36　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（3）

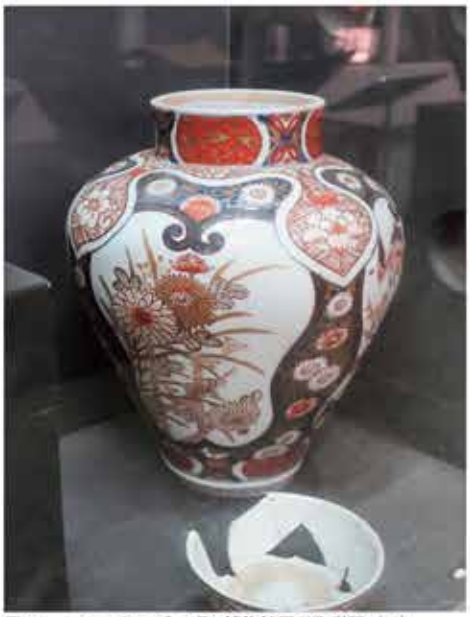

図 37　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（4）

図 38　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（5）

図 39　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（6）

図 40　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（7）

図 41　フォート・ジーザス博物館展示陶磁器（8）

図 42　フォート・ジーザス出土陶磁器（1）

図 43　フォート・ジーザス出土陶磁器（2）

図 31 ～ 42（Courtesy: Fort Jesus Museum）、図 43（栗建安氏提供）

図 44　ジュンバ・ラ・ムトワナ遺跡（1）

図 45　ジュンバ・ラ・ムトワナ遺跡（2）

図 46　ジュンバ・ラ・ムトワナ遺跡出土陶磁器

図 47　ジュンバ・ラ・ムトワナ周辺民俗資料

図 48　ジュンバ・ラ・ムトワナ周辺伝世資料

図 49　ムナラニ遺跡

図 50　ムナラニ遺跡

図 51　ムナラニ遺跡（「キリフィの廟」）（三上 1969 より）

図 46 ～ 48（Courtesy: Jumba La Mtwana Museum）

図 52　ゲディ遺跡（The Great Palace）

図 53　ゲディ遺跡（The Great Mosque）

図 55　ゲディ遺跡（The Pillar Tomb）

図 54　ゲディ遺跡（The Tomb of the Fluted Pillar）

図 56　ゲディ遺跡（The Pillar Tomb）

図 57　ゲディ遺跡出土磁器

図 58　ゲディ遺跡出土磁器

図 57 ～ 58（Courtesy: Gede Museums）

図 59　ゲディ遺跡出土磁器

図 60　ゲディ遺跡出土磁器

図 61　ゲディ遺跡出土磁器

図 62　ゲディ遺跡出土磁器

図 63　ゲディ遺跡出土磁器

図 64　ゲディ遺跡出土磁器

図 65　ゲディ遺跡出土磁器

図 66　ゲディ遺跡出土磁器

図 59 ～ 66（Courtesy: Gede Museums）

図 67　マリンディ（バスコ・ダ・ガマ・クロス）

図 68　マリンディ市街

図 69　マリンディ（柱墓）

図 70　マリンディ（柱墓の囲い壁）

図 71　マリンディ（ジャミア・モスク）

図 72　マリンディ（ジャミア・モスク隣接墓地）

図 73　マンブルイ（柱墓）

図 74　マンブルイ（柱墓）

図 75　マンブルイ（柱墓）

図 76　マンブルイ（柱墓に埋め込まれた磁器）

図 77　マンブルイ（柱墓に埋め込まれた磁器）

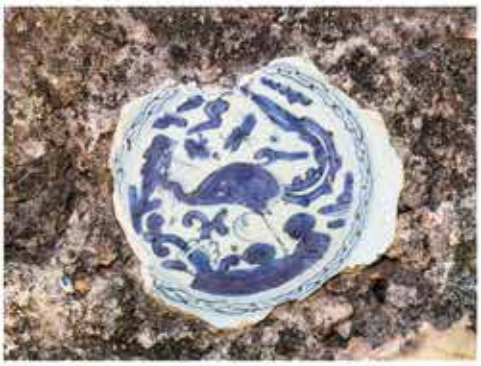
図 78　マンブルイ（柱墓に埋め込まれた磁器）

図 79　マンブルイ（柱墓に埋め込まれた磁器）

図 80　マンブルイ（柱墓に埋め込まれた磁器）